入選

漆間 虹美（うるま こうみ）国立音楽大学附属中 1年生

作品名：心の扉

図　書：愛をみつけたうさぎ

「昨日、東京都内で通り魔事件が起こりました。事件に巻き込まれた二人のうち一人は意識不明の重体です。犯人は…」

ピアノの練習の手をふと止めた時、隣の部屋のテレビからアナウンサーの淡々と話す声が聴こえてきた。事件は絶えることなく、毎日起こり続ける。世の中には、テレビや新聞等で伝えられていない他の事件も、まだ数えきれない程あるだろう。そして、犯人も被害者も決っしていなくなることはない。それがあたり前。いいや、あたり前だと心のどこかで決め付けていたのだ。

私はニュースを見ながら、「怖いな」と、ただこれだけの感想を持っていた。毎日悲惨な事件が起こるから、耳も心も慣れてしまったのだろう。そして、いつしか「私には関係ない」と人ごとのように感じてしまう。

そんな時に出会ったのが、『愛をみつけたうさぎ』という本だった。

主人公エドワードは、陶器でできた素敵なうさぎの人形だ。アビリーンという女の子にとても愛されていた。しかし、傲慢なエドワードは、アビリーンに愛されていることに何の興味も示さない。愛することを知らないうさぎだったのだ。きっと、今の環境を当たり前だと思い込んでいたのではないだろうか。

そんなエドワードに、過酷な日々が待ち受けていた。エドワードはアビリーンと離れ離れになり、様々な人のもとに身を置くようになる。その旅の途中、多くの人に愛されるが、必ず予期せぬ悲しい別れをしなくてはならなかった。いつしかエドワードの心には、相手を思う気持ち、「愛」が芽生える。失ってみて初めて気づくことができたのだろう。

私が愛している人。それは家族だ。どんな時でも傍にいてくれる家族が大好きだ。私はふと考える。もしも大切な人を失くしてしまったら…。考えると辛くて、心が凍りそうになる。私もエドワードのように、今の環境をあたり前だと思い込んではいないだろうか。考える程、家族への感謝の気持ちが強くなっていく。そして頭によぎったのは、テレビで見た事件の数々だった。いつかは無かったことのように、忘れられてしまう出来事かもしれない。でも、その事件にあった人にも大切な家族がいたはずだ。その人達はどんな気持ちだったのか、想像すると胸が締め付けられる。

一方、犯人はどうなのだろうか。もしかすると、愛を知らなかったのかもしれない。なぜなら、私だったら愛する家族を悲しませるようなことは、絶対にできないと思うからだ。人は生まれながら悪い人はいないはず。どこかで人生の歯車がくるってしまったのだろう。だけれど、そんなあわれむべき犯罪者も私達と一緒の人間だ。誰だって一歩間違えれば犯罪に走ってしまう可能性はある。その可能性が現実になることを止めることができるのは、私達同じ人間だ。そう、私達は支え合うことで生きていける。自分が困っている時は誰かの助けをもらい、誰かが困っている時は手を差しのべる。そういう思いやりがあるから生きていけるのだ。

本の中では、百年以上生きてきた人形がエドワードにこう言った。

「心を開くのよ」と。

エドワードは旅の最後に行き着いたところで、この人形に出会い、生きる意味は愛し愛されることだと教えてもらった。そして、愛されるためには、まず自らの心を開くことが必要だとエドワードは知った。その心の扉の向こうには、希望の未来が待っている。エドワードは旅の終わりを見つけたのだ。

この言葉を目にした時、私は体の力が全て抜けるような、不思議な気分になった。人は、愛し愛され支え合うことが「生きる力」となるのだ。だけれど、心を開かないで孤立してしまえば生きる力もなくなり、もしかすると犯罪をおかしてしまうこともあるのかもしれない。皆が心を開いてくれる為に、私は何ができるのだろうか。私にしかできないことは何だろうか。ピアノを弾きながら、私は考え続ける。

「そうだ!これだ!」その時体に衝撃が走った。以前私の演奏に涙して、

「良かったよ。明日から仕事頑張れそうだ。」と言ってくれた人がいたことを思い出した。私は困っている人のためにピアノを弾きたい。そして勇気づけてあげたい。心を込めて演奏すれば、きっと誰かの心に響くだろう。私にできることはとても小さいことかもしれないけれど、ピアノの腕をもっと磨き、少しでも多くの悩める人の心を救いたい。

私はこの本に出会い、自分の目指すべきことをはっきり心に刻むことができた。どんな大変な練習も、今まで以上に頑張れるようになった。これからももっと努力して、人の心に響く音を奏でられる人に、私はなりたい。